
俺と童話のキャラと学園生活

東条 優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と童話のキャラと学園生活

【Nコード】

N5622M

【作者名】

東条 優

【あらすじ】

2010年、人類はおとぎ星という新たな惑星を見つける。そこにはおとぎ話や童話のキャラクター達が住んでいた。時は過ぎ、地球生まれの地球育ちの少年、御伽宗弥みかむねやはおとぎ星に住むように日本政府に命令されて……。御伽君を中心に巻き起こる笑いあり、戦闘あり、涙あり、恋あり？な非日常が始まる。

第1話「非日常は唐突に」

2010年、惑星調査機『シリウス54-6』が新しい惑星を見つけたと一時話題になったものだ。

何でもその惑星には生命体もいるという。

だが、この頃人類はその星に行く技術を持っていなかった。

そのため最初は話題になったものの次第に人々の興味は薄れていった。

そして、現在。

2025年、俺こと御伽宗弥^{おがみそうや}は目の前の一枚の紙切れを見て言葉を失っていた。

時間は少し遡り、俺は中学校最後のイベントである卒業式を無事に終え、親友共に騒いだり、泣いていた女子を慰めたりして、同級生と中学生としての最後を楽しんできた。

2

その後、家に帰り、いつものようにお茶を飲もうかななんて思い、冷蔵庫からお茶を取り出し、食器棚からコップを持ってきて、テーブルで注ぐと、テーブルへ向かった。

そしてテーブルの上にコップを置き、お茶を注いでいると、封筒がテーブルの上に置いてあることに気がついた。

何の封筒かなって思い、宛先を見てみると俺宛になっていた。

差出人は、つと・・・日本政府！？

「いやいやいや、そんなまさかね・・・。」

俺はこれでも一応、貧乏ではないが金持ちでもない。一般的な庶民なのだ。まして政府に喧嘩を売るようなこともしていない・・・多

分。

落ち着け。はい、深呼吸。吸ってえ・・・吐いてえ・・・。
もう一度、差出人を見る。やっぱり日本政府って書いてある。
とりあえず中身を見てみよう。そう思い封筒を開け、中を取り出す。

そして今に至ったのだった。

「何だこれ・・・。」

そこにはこう書いてあった。

・御伽宗弥様。あなたは我々の新プロジェクト『おとぎ星居住計画』
の2人目の対象者に見事選ばれました。あなたにはこれからおとぎ
星に行ってもらいます。

なお、あなたのご両親からはすでに許可は取っております。つきま
しては3月14日の14時にお迎えに上がらせていただきます。な
ので出発の準備などよろしく願います。

うん、話が急すぎませんか？

しかも、おとぎ星って何？生まれてこの方聞いたこと無いんですけ
ど。

こうやって悩んでいても仕方が無い。親に電話だ。

携帯電話から親に電話をかける。

「父さん、何か日本政府から手紙が来てるんだけど。」

『すまんすまん。言うのが遅れたよ。その手紙に書いてあることは
本当だから。ハッハッハッ!!』

「ハッハッハッ、じゃないよ。許可出したって本人が納得してない
のにどういことだよ!？」

『いや、たくさんお金詰まれちゃってさ思わず了承しちゃったよ。
今そのお金で、北海道に旅行に行ってるんだ。そういうわけだから

頑張ってくれ。ハッハッハッ！』

はっ！？お金で売られた！？

あの人達は本当に親なのか？ふざけてやがる。

もう一度、手紙を見る。

迎えに来るのは3月14日の14時。今は3月14日の13時45分。

つてやばくないですか。もう来ますよね。

俺は急いで自室に行き、服やら下着やら何やらバックに荷物を詰めていく。

すると、ピンポンとチャイムが聞こえる。時計を見るとすでに14時だ。

バックを手に取り、玄関へ向かう。そしてドアを開けると、そこには黒スーツに身を包み、黒いサングラスを掛けたSPのような人が2人と、その2人に挟まれている、武将ひげを生やしたひよる長い30代ぐらいのおじさんがいた。

「お迎えに上がりました。御伽宗弥様。」

こうして、俺の非日常への扉が開かれた。

第1話「非日常は唐突に」（後書き）

みなさん、こんばんは。

Angel beats if を見ていた方はお久しぶりです。

いかがだったでしょうか？

この作品は学園物に童話のキャラクターをぶっこんだ物となっています。

今回は童話のキャラは出てきませんでしたがこれから出していきます。

更新頑張っていきますので、温かい目で見守っていただければ嬉しいです。

それでは、次回もお楽しみに。

第2話「おとぎ星居住計画」

俺は今、宇宙ステーションとやらにいる。

迎えに来たと言われ、ここまで高そうな車に乗せられ、連れて来られた。

「で、何で俺が選ばれたんですか？」

宇宙ステーション内の廊下を歩きながら隣にいるヒョロ男に話しかける。

「あなたが一般的な人間だからです。」

「それだけで？」

「はい、それだけです。」

ヒョロ男はさも当然の様に言う。

「じゃあ、『おとぎ星居住計画』は何なんですか？」

「何から話しましょうか・・・そうですね、まずはおとぎ星について説明しましょうか。」

そう言つて、小型の映像出力装置を取り出す。ボタンを押すと地球に似た惑星の映像が映し出された。

「2010年に見つかった惑星をご存知ですよ。その惑星を我々がさらに調査したところ、我々に似た生命体がありました。その生命体と言うのが我々が良く知っている童話やおとぎ話に出てくるようなキャラクター達であることが分かりました。」

「童話の!？」

「ええ、まあ童話といっても動物が喋るとかではなく、キャラクターの個性を受け継いだ生命体と思っていただいてかまいません。このことから政府はその惑星をおとぎ星と呼んでいます。」

「2つ目にこの計画の目的は地球からの移住です。近年、地球温暖化が進み、30年後にはおそらく地球は、我々人間が住める場所では無くなるでしょう。」

ヒヨ口男は悲しそうに言うが、すぐに明るくなってこう言った。

「ですが、おとぎ星の発見によって事態が変わりました。おとぎ星と地球は非常に似ていたのです。我々政府はおとぎ星に移住しようと考えました。」

「しかし、おとぎ星の方々も簡単に我々を受け入れる訳ではありません。そこで、話し合いの結果、1年間のお試し期間という事で、貴方が地球代表として行くことになったのです。」

なんか凄いことになってませんか。

俺が地球代表？ないないない。

「俺、高校とかに行かないと行けないんだけど？」

「地球のことでしたら我々にお任せください。こちらで隠蔽工作をしておきますから。なにせこちらは日本政府ですから。」

隠蔽って言いましたよ。この人。権力振りかざしてますよ。

そんな思いが届くわけも無く、転送装置の部屋に連れて行かれる。

「それでは頑張ってきてください。」

そう言われ、背中を押される。そのせいで転送装置に入ってしまった、一瞬で視界が真っ白に切り替わった。

「うう……。」

気がつくと、研究施設のような場所に飛ばされていた。時間は全然経っていない気がする。

「@#\$'\$()"'''」

何やら茶色の髪をポニーテールにしている女の人が俺に話しかけている。

だが意味が理解できない。そりゃそうか、相手は宇宙人だもんな。見た目はどう見たって人間にしか思えないが。

「\$\$\$#&()' %\$#」

すると女の人が俺の腕を掴み、俺は別の部屋に連れて行かれた。

その部屋はどこぞの怪しい研究施設ですか？と言いたいぐらい分けるわからん装置がズラリと並んである。

俺は部屋の真ん中にある手術台(？)のような場所に寝かされると腕や足を固定させられる。

そして女の方は俺の首に注射を刺すと、俺は深い眠りについた。

目を覚ますと視界には白い天井が映った。

体を起こすと目の前に先ほどの女の方の顔が入ってきた。

「起きた！？起きたみたいだね、だね♪」

うるさい声で眠気がすっ飛んでいく。

それにしてもテンション高いなあ。って俺、意味が理解できてる。

「って何で言葉が分かるんだ！？」

思わず叫ぶ。すると目の前の女は笑って、

「私さね、この星の言語プログラムのチップを頭の中に埋め込んだからだよ、だよ♪どうどう？その様子だと効果は出てるみたいだね、

だね♪」

と言つてのけた。頭の中にチップを！？そんな馬鹿な。頭を触つてみる。だが傷や縫った後などは見つけれない。

「傷なんて探しても無いよ。このおとぎ王国の医療技術は素晴らしいんだよ、だよ♪分かつてくれたかな、地球の留学生君♪」
嬉しそうに語り始める目の前の女。

するとその女は、あつと何か思い出したように口を開く。

「そういえば自己紹介がまだだよね、よね♪私の名前は舌桐雀^{したきりすずめ}っていうんだよ、だよ♪よろしくね。」「

舌桐雀・・・ああ『舌切り雀』がモデルなのかな。

ヒョロ男が言つてたことは本当の様だな。

「俺は、御伽宗弥だ。よろしくな。」「

そして俺は握手しようと手を差し出す。舌桐雀も手を差し出し、お互いに手を握り合つた。

第2話「おとぎ星居住計画」(後書き)

いかがでしたか？
次回もお楽しみに。

第3話「出会いは突然に」

舌桐雀と握手を交わすと何故か舌桐雀は顔を赤くしていた。

「顔を赤くして大丈夫ですか？熱でもあるんですか？」

心配になり尋ねると、舌桐雀は手を頬に当てて、

「だって男の人と手を握ったの初めてなんだよ、だよ」だって私この国の大統領の娘なんだからね、ね」

と言った。

・・・！！

大統領の娘！？えっ！？ってことはかなり偉い方だよな。目の前にいる女。

「あんまりそういうの気にしないで良いからね、ね」だから私の事は雀って呼んで良いんだよ、だよ」

笑いながら言う雀さん。

「まあ、とにかくこの星を案内してあげるからね、ね」

そう言われ、俺達は部屋を後にした。

その後、スーパーやら遊園地やら病院、市役所など見て周り、次に訪れたのは童駅わらへえきという駅だった。

ここはおとぎ王国第3エリアにある駅で、日本の駅と比べ物にならないほど大きかった。

「この駅からはどのエリアにでも行けるからたくさん利用すると思うんだよ、だよ。」

「へえ、そうなんだ。・・・ってあれ!？」

歩いていると、駅の裏側の方で一人の黒髪の女性が学ランを着た男達に絡まれていた。

「ねえ、俺らと遊ばない？」

絵に書いた様な不良、お決まりの行動。

そんな不良達に怯える女性。

ここは助けるべきだよな。

「この辺りを縄張りになっている鬼島高校の不良なので、手を出したりしたら駄目だよ、だよ」SPをすぐに呼ぶから・・・って御伽君。」

雀さんの言葉を無視し、地球から持って来ていた竹刀を取り出す。なんで竹刀を持っているかというと、中学時代は剣道部だったからだ。

竹刀片手に不良達に近づいて行く。

「餓鬼はあっちにいつてろ。」

俺の存在に気付いたモヒカン野郎（以後、不良Aとする。）は、顔を物凄く近づけてきやがった。

おいおい近すぎるだろ。口と口が当たりそうなんですけど。

ファーストキスがこんなヤツとか人生終わるな。マジで。

俺は無言で、竹刀を振り、見事に不良Aの右頬に直撃する。

そのまま横に飛ばされ、ゴミ捨て場に突っ込んでいった。不良Aは白目をむいて気絶している。

それを見て残りの不良3人が殴りかかってくる。

デブ男（不良B）、リーゼント（不良C）、スキンヘッド（不良D）の3人組である。

不良Bのパンチを横にそれることでかわし、すね、鳩尾に竹刀を叩き込む。

不良Bが膝を着く中、不良Cがタックルを仕掛けてくる。俺は不良Cにあえて突っ込み、当たる瞬間左にそれ、首筋に竹刀を振り落とした。

だが、俺の快進撃もここまでのようで。

「・・・つつつ。」

背中に激痛が走る。どうやら不良Dがナイフか何かで後ろから背中を刺しているようだ。

竹刀を握る力が弱くなるが、ギュッと掴みなおし、振り向きざまに不良Dの脳天に叩き込む。

不良Dが気絶し、倒れるのと、俺が痛みで立てなくなり、膝を突くのは同時だった。

「まあまあまあ、凄い傷ですねぇ。」

「いてて・・・。」

「消毒してるから痛いのは我慢してくださいねぇ。」

俺は不良たちとの戦闘の後、雀さんと助けた女性にここに連れて来られたのだった。

俺の傷はそこまで深くなかったらしく、心配するほどのものでもないらしい。

「はい、終わりましたよ。」

そして目の前にいる手当てをしてくれた女性・・・赤毛の髪に2本のアホ毛が特徴的な女の人である。何故か格好は看護師さんとかの格好ではなく、エプロン姿だが。というよりもここは病院では無い。おとぎりょう御伽寮と呼ばれる寮である。

「でも、びっくりしちゃいましたよ。入寮の日にまさか血を流す子がいるなんて。ねえ、雀ちゃん。」

「ええ。そうですね、ね。」

相変わらずハイテンションな雀さん。

「自己紹介はまだでしたね。私は鶴野琴羽つるの ことばといいます。御伽寮の寮母をやっています。何かあったらいつでも声を掛けてくださいね。御伽宗弥君。」

なんか優しそうな人だなあ。昔話で言うところの『鶴の恩返し』の鶴みたいな。

「言い忘れてましたけど、御伽君は今日からここに住むことになるからね、ね。」大丈夫、大丈夫、鶴野さんはお世話好きだから心配することは無いんだよ、だよ。」

「だよ、じゃねーよ。いきなりここに住めって。あれ！？ってことは俺は学校にも行けるのか？」

「そうだよ、だよ。」おとぎ王国一番の高校、グリム学園に入学できるなんてラッキーだね、だね。」

そんなこんなで盛り上がっていると、

「あ、あのお、先ほどは助けていただきありがとうございます。」頭を下げてくる女の子。

「別にいいよ。頭を上げてよ。」

その言葉を聴いて暫く頭を下げたままだったが、ゆつくりと頭をあげた。

その女の子はきれいな黒髪をしていて、顔はほんの少し幼さが残る感じで、足もすらっと細くきれいな人だと思った。

第3話「出会いは突然に」(後書き)

いかがでしたか？
次回もお楽しみに。

第4話「おとぎ寮」

手当てが終わったので、寮の中を案内してもらったことにした。

「こつちが男子寮で、ここから少し歩いたところが女子寮なのよ。」
鶴野さんの案内の下、俺と俺が助けた女の子と一緒に歩いている。

女の子の名前は姫沢白雪^{ひめざわしらゆき}さん。どうやらモデルは『白雪姫』のようだ。

彼女も俺と同じく今年からグリム学園に入学するそうだ。

雀さんは別用でどこかに行っちゃっている。

「さきに女子寮の方を案内するから、御伽君はここで待っててね。」

「あ、はい。」

鶴野さんは姫沢さんを連れ女子寮へ向かって行った。

残された俺は、石段に腰を下ろす。

時刻は夕暮れ時、部活帰りの生徒達がちらほら寮の中に入っていく。

そんななか俺の目の前で足を止めた人物がいた。

「新入生みたいだにや〜。その竹刀、君のかにや〜？君、剣道部に入らないかにや〜。」

にや〜にや〜言う人だなと思い顔を上げる。

そこには背の高い猫ひげが生えた男がいた。

手には竹刀とフェンシングで使うような剣を持っている。

何故か雨も降っていないのに長靴を履いている奇妙な男だった。

「自己紹介が遅れたにやゝ。俺っちの名前は藤堂猫吉だにやゝ。グリム学園の3年で剣道部の部長でもあるんだにやゝ。」
藤堂猫吉、猫みたいな容姿に長靴・・・『長靴を履いた猫』がモデルになっているのか。

「それで、入るのかにやゝ？」

「一応、そのつもりです。」

中学時代も剣道部だったし、高校でも続けるつもりだったからそう言っておく。

「それは嬉しいにやゝ。楽しみに待ってるにやゝ。」
そう言って猫吉先輩は寮の中に入っていた。

しばらくすると、鶴野さんが戻ってきた。
今度は男子寮を案内してくれるらしい。

「ここが御伽君の部屋ですよ。」
ドアには、204号室とプレートが掛かっており、近くの壁には御伽宗弥とその下に浦島太郎と書かれている紙が張ってあった。

「浦島君はあなたと同じ新入生で、ルームメイトでもあるから、仲良くしてね。」

浦島太郎ってあれだろ、亀を助けて、竜宮城に行つて、玉手箱をもらい、それを空けたらおじいさんになったってやつだろ。

ルームメイトがおじいさんって嫌だな。

見ても無いルームメイトを勝手に想像して、落ち込む俺。

そんなことを知る好まない鶴野さんはドアを開け、俺が中に入るよ

うに促す。

俺は意を決して中に入る。

部屋の中は至って普通で入って右側に二段ベットがあり、左側には勉強机が2つ置いてある。

入り口の近くにはタンスもあつた。

「ちーっす、今日から同室になる御伽です。」
ベットに座っていた少年に愛想よく挨拶する。

「初めまして、僕は浦島だよ。よろしく。御伽君」

見かけは極普通の少年の浦島。

大柄でもなく小柄でもない。太っているわけでもなく痩せているわけでもない。

顔も不細工でもなければカッコいいわけでもない。
至って普通なのだ。

唯一つおかしいのは何故か手には手錠が掛けられていた。

「どうしたんだ、その手錠。」

俺は疑問に思い、聞いてみた。

すると、浦島は苦笑し、

「ちよつとね。」

と言った。なにやら分け有なのだろうか。

それを見た鶴野さんは目を輝かして、

「その手錠、私が外してあげましょう。」

そういつて浦島に急接近する鶴野さん。

そつえばお世話好きとか雀さんが言つてたよな。

「いいですつて。」

でも、その行為を拒絶する浦島。

だが突然、その動きが止まった。

浦島の目線の先を追う。

目線の先、入り口には、一人の小柄な少女がいた。

肌は白く、手入れしているであろう黒髪は腰まで真っ直ぐに流れている。

なぜ、男子寮に女子がいるんだなんてことは彼女の次の行動で吹っ飛んでいってしまった。

その少女は何故かスカーフを外しながら、

「浦島君、私に一声掛けてくれたら良いのに。」

そう言つて、浦島に近づいていく。浦島は完全に怯えている。つてかセーラー服を脱ぎ始めたぞ。

とりあえず俺は鶴野さんと共に部屋を出る。

ドアを閉めるときに、浦島の悲鳴が聞こえた。

その後に、ドア越しにまあいろいろと声が聞こえたが、それは皆さんのご想像にお任せします。

暫くたつた後、セーラー服を着た少女が、鼻歌を歌いながらニコニコとそりゃあもう嬉しそうに部屋を出て行った。

浦島は何故か遠い目をしていた。物凄く疲れているのが伝わってくる。相変わらず手には手錠がついていたが。

こうして御伽星での初日が終わった。

第4話「おとぎ寮」(後書き)

いかがでしたか？
次回もお楽しみに。

第5話「入学式」

おとぎ星に来て2日目、今日から学校だ。
そして新人生最初の行事、入学式の日でもあるのだ。

入学式といえば、無駄に長い話があり、怠い気分になるものだったが、目の前の光景に驚きを隠せなかった。それは周囲の生徒（ほぼ新人生）も同じで、驚いているもの、顔を真っ赤にしているもの、蔑む目で見ているものなど様々である。

その原因は壇上にいる一人のせいだった。

何故か壇上にはパンツのみしか着ていない筋肉ムキムキのおっさんが出てきていた。

あのおっさんの名前は王寺^{おうじげんせい}厳正。

おそらくモデルは『裸の王様』であろう・・・多分。でないただの露出狂になってしまう。

グリム学園の学園長でもある・・・多分。ってかこのおっさんが学園長で大丈夫なのか、この学校は。

「・・・ええではこれで話を終わります。」

学園長は壇上から降りていく。

その後は普通どおりに進み、それぞれの教室に案内される。
俺のクラスは高等部の1年2組。2階にある教室だ。

ちなみにここ、グリム学園は、初等部、中等部、高等部から成り立っている。

日本で言うところの私立みたいだが、おとぎ星ではほとんどの学校がこんな感じらしい。

一緒のクラスになった浦島と自分達の教室へ向かう。

昨日、着けられていた手錠は今着いていないが、変わりに昨日の少女が浦島に張り付いていた。

「ねえ、浦島。君に張り付いているその子は誰？」

「彼女は……。」

浦島が答えようとするのを少女の言葉が遮る。

「私は竜宮寺乙姫わたくしりゅうぐうじおとひめといいます。浦島君の彼女です。乙姫って呼んでください。」

「……違います。」

乙姫ちゃんの言葉を即否定する浦島。その顔は完全に引きつっていた。

「もう、浦島君ったらあ。素直になれないんですね。だったら素直にさせてあげます。」

そう言つて乙姫ちゃん人目も気にせず浦島に襲い掛かっていた。浦島は必死に抵抗するが、その抵抗もすぐに失敗に終わり……。この後はご想像にお任せします。

俺はそんな2人を置いていき（というか空気を読み）、1年2組の教室へと足を踏み入れた。

教室の中は地球と変わらず、教卓があり、縦6列横6列に並んだ机と椅子。

前と後ろには黒板があり、掲示板にはまだ何もプリント類が張られていない。

だが、入学式の日とは思えないほど教室内は騒がしかった。だが、全員が騒がしいのではなく、寧ろほとんどの生徒はまた始まったかと呆れている様子。

騒いでいるのは教壇で睨み合っている女の子2人だった。

一人は赤い髪をベリーショートにしている女の子。

小柄な体格ながらも、威圧感を体中から出している。

もう一人は、金髪のツインテールの強気な目が特徴の女の子。背も高く、スタイルも良い女の子。その体からは闘志が満ち溢れている。

「ふざけないでよ。」

「ふざけてないよ。大神さん。あなたが単細胞なだけだと思うよ。」

これだからスポーツ馬鹿は困る。」

怒り狂う大神さんと呼ばれたツインテールの女の子を、罵倒する少女。

さらに激しさが増していく。2人の間で火花が見えるほどに。

だが、それを沈下するように何かが2人の間に飛んできて黒板に刺さっていた。

矢が刺さっていたのだ。

「・・・喧嘩は良くない。」

教室の後方にいた一人の女の子が言った。

背の高さは普通で、軽くウェーブがかかった長い黒髪の女の子の手には弓が握られていた。

「・・・はい。」

「・・・分ければ良い。」

おとなしく席に戻る2人の女の子とそれを見て満足そうな弓を持った女。

「・・・やあ、御伽君。」

後ろには先ほどまで襲われていた浦島が。まだ昼前と言いつのに生氣を感じられない。

この学校大丈夫なのか!?

そんな不安が頭をよぎると同時に、教師が教室に入ってきた。

第5話「入学式」(後書き)

いかがでしたか？
次回もお楽しみに。

第6話「クラスメイト」

教師がやってきたので俺は自分の席に着く。
教師は眼鏡をかけた痩せている男であった。

「おはようございます。一緒のクラスだったんですか。嬉しい。」
いきなり隣の席のヤツからそう言われた。
誰だ？そう思い横を向く。

そこには昨日助けた女性、姫沢白雪さんの姿が。ニコニコと朝から
笑顔を見せてくれた。

「お、おはよう。」

挨拶を返す。その後すぐに教師の提案で自己紹介をしていくことになった。

その中でも特に気になったやつを紹介しよう。

一人目は、

「桃山太郎だ。よろしく。」

金髪ツンツン頭のヤンキーが無愛想に挨拶をする。

学ランのボタンは全部外し、腰には木刀を挿している。

おそらくモデルは道を踏み外した『桃太郎』ってところだろうか。

「おいらは金本太郎ってもんだ。仲良うしてくれたら嬉しい。」

桃山太郎の右隣に座っていた大男が言った。

どのくらい大きいかと言うと、地球のチェ・ホンマンぐらいだ。

短めに切つてある黒髪、そして鉢巻を着けている。

モデルは『金太郎』だろう。

俺の左斜め後ろであり姫沢さんの後ろの席にいた少女が言った。

「ボクは赤津鈴^{あかつりん}。皆さん仲良くしてね。」

先ほど壇上で喧嘩していた少女である。

モデルは『赤ずきん』かな。

俺の前の席の先ほど喧嘩していた大神が、

「大神奈菜^{おおかみなな}だ。よろしく。」

と言った。目つきが怖いです。

モデルは狼？か。舌切り雀が擬人化してるから狼もありなのか。

そして左から4番目の一番後ろの席に座っていた、喧嘩を止めた女の子が立ち上がった。

「・・・西園かぐや。・・・よろしく。」

そう言っつて再び席に着く。

背の高さは普通で、軽くウェーブがかかった長い黒髪の女の子だ。

モデルは・・・『かぐや姫』だろうか。

そして自己紹介は進み、最後の一人となったわけだが、

「いない・・・みたいだな。」

俺が言った。学校初日だというのに空席が合った。

だがほとんどの生徒は、

「茨木さんなら仕方ないわね。」

と口々に言っている。

「茨木さんってどんな子なんだろうね？」

俺の後ろの席の浦島が話しかけてきた。

俺はさあ？としか答えられなかった。

自己紹介も終わり、教師が職員室までプリント類をとりに行った。その間は自由時間となり、生徒達は喋り始めた。

白雪さんと赤津鈴はすぐに仲良くなった。

たまたま近くの席にいた俺や浦島にも話しかけてくれたおかげで、仲良くなれたかな。

話をしていく上で分かったことが2つある。

赤津さんと大神さん、桃山、浦島、金本、乙姫ちゃん、今日いなかった茨木は初等部からここまで来ているらしい。

編入してきたのは、俺と白雪、西園さんの3人のみということだ。

もう一つは茨木さんのことだ。彼女は風邪などで休んでいるのではないらしく、不登校ということなのだ。理由は分からないが、赤津さんによると俺は見かけても声を掛けない方が良いらしい。何でだ？

まあそんなこんなで教師も戻ってきて、今日は午後の授業もないらしく、各自、帰って良いことになった。

「浦島、帰ろうぜ。」

「あ、うん。」

帰る準備をしていると、

「あ、あの・・・御伽君。」

姫沢さんが声を掛けてきた。顔が赤い。

「どうしたの？姫沢さん。」

「お昼、ご一緒しませんか？」

「別に良いけど、なあ浦島。」

「うん。」

彼女の提案に肯定する俺達。

「ボクも一緒にしてもいいかな。」
赤津鈴も一緒のようだ。

『1年2組、御伽君、至急、職員室前まで来てね、ね』
突然、放送で呼び出された。というかこの喋り方どこかで聞いたことがあるような。

「呼び出しくらったから行って来る。校門のところで待ってて。」
「分かりました。」

姫沢さんにそう告げ、俺は職員室へ向かった。

第6話「クラスメイト」(後書き)

いかがでしたか？
次回もお楽しみに。

第7話「約束と凶暴女」

職員室前まで来ると、学校の制服に身を包んだ雀さんの姿があった。

「来てくれたんだね、だね」

相変わらずのハイテンション。ってかここの生徒だったんですか!?

「ここの生徒なんですか？」

「うん、そうだよ、だよ。私は、ここの2年でもあるから、困つきにはいつでも来て良いよ、良いよ」
上機嫌な雀さん。

「それで君を呼び出した理由なんだけどね、ね、うん、この辺じや話しにくいから、ついてきてね、ね」

雀さんに手を引かれ、空き教室に入る。

近くにあった席にお互い座り、雀さんは口を開いた。

「御伽君、地球から来たってことまだ誰にも言っていないかな、かな」

「ああ、言っていないけど。」

「そう、ならね君が地球から来たことは口外しないでね、ね、何でかっていうとね、おとぎ星の人たちは友好的な人もいるけどね、ね中には地球人なんて嫌いだっていう人たちもいるんだよ、だよ」
そんな人たちに君のことが知られたら御伽君は命を狙われちゃうかもね、ね」

真剣な表情で言う雀さん。

「えっ!? マジですか!？」

「うん、大マジだよ、だよ」

ええー！！ここに来てそうそう命を狙われるかもしれないなんて。

危険と隣り合わせじゃないか。さようなら、俺の青春、そして人生よ。

「負のオーラが出過ぎだよ、だよ」地球から来たってことがバレなきゃ命狙われることもないんだよ、だよ」

その言葉を聴いた瞬間、希望の光が差し込んできた。

「そうだよな。バレなきゃいいんだ。」

このセリフだけ聞いたら犯罪をしようとしてるみたいだぞ、俺。

その後、軽く今後の話をして教室を出た。

だが、この会話を盗み聞いているヤツがいた。そして、闇の中に消えていった。

「悪い。待たせちゃった？」

「待ったよ。お腹が減って死にそうだね。今日は御伽さんの奢りだから。」

赤津鈴がわざとらしく怒った。

「分かった。分かった。奢る、奢るよ。」

俺と、姫沢さんと赤津さん、浦島と乙姫ちゃんの5人で近くのファミレスへ向かった。

今回訪れたファミレス店『アンデルセン』は第3エリアにある。
駅前と言ったこともあり、なかなかお客さんは入っていた。

奥の席に座る。俺の隣には姫沢さんがおり、その隣に赤津さん、俺の正面に浦島と乙姫ちゃんがいる。

「えっと・・・フライドポテトと、オレンジジュース5つ・・・それから・・・」

「ハンバーグセットをお願いします。」

「ボクはお子様ランチ。」

「浦島君、半分こしよう。」

そんなこんなで注文をしていく。

「ちょっと・・・」

俺は手を洗いにトイレの洗面所に行こうと席を立つ。

トイレに向かっていると、店員と思われる女性にぶつかりそうになる。

「すみません、大丈夫ですか？」

一応謝ると、その女性は体をワナワナと震わせていた。

あれ、徐々に拳が・・・。って何で構えてるの？この人。

「いやあああああ!!」

そのまま俺の鳩尾へ一直線の女性の拳。当たった瞬間、骨が折れたんじゃないかと思うくらいの激痛が走る。

そのまま、壁まで吹き飛ばされ、背中から壁にぶつかる。

「・・・いてて。なにすんだ・・・よ？」

顔を上げると、あの女がまた拳を振り下ろしてきた。

それを見て、数名の従業員（全て女）が彼女を落ち着かせ、そのうちの一人が申し訳なさそうに頭を下げてくる。

何だったんだ？あの女は。そう思いながら手を洗い、席に戻ってくる。

すると、席に座っていた赤津さんと浦島が声を掛けてくる。

「大丈夫？まあ、さっきのは御伽さんが悪いよ。」

「彼女は男性恐怖症だからね。」

「お前ら知り合いなのか？」

俺は浦島たちに尋ねた。

「知ってますとも。彼女が不登校の茨木さんだからね。」

そう言って、赤津さんはフライドポテトを一つ摘んだ。

第7話「約束と凶暴女」(後書き)

いかがでしたか？
次回もお楽しみに。

第8話「グリム学園の不良」

「彼女が不登校の茨木さんですわ。」

「不登校の・・・？」

「ええ、男性恐怖症だから学校に来なくなったのですわ。」

だから、あの時、俺は殴られていたのか。

それにしてもあの怪力は一体・・・？

というよりも、そんなヤツが良く今まで、バイトできたな、と思っ
てしまう。

「それより早く食べないと冷めるよ。」

赤津さんに言われ、自分が食事に手を付けていない事に気づく。

俺は自分の頼んでおいたカレーライスを頬張った。

食事を済ませ、それぞれの寮に戻るようになった。

俺と浦島は寮に戻ると、一人の男が寮の入り口にいた。

「止まれ。」

横を通り抜けようとしたが、それを男の声が遮る。

その男は金髪でツンツン頭の少年、同じクラスの桃山太郎だった。
腰には木刀が挿している。

「御伽君・・・関わらない方が良いよ・・・。」

浦島が怯えながら言う。

「御伽宗弥、鬼島高校の不良を倒したって言うのは本当か？」

「ああ、そうだが。」

俺は答える。

「まさか本当だったとわな。御伽宗弥、俺はお前に決闘を申し込む。」

「へ？」

俺を指差し、高らかに宣言する桃山。

「明日の放課後、体育館裏で待っている。」

そう言つて、桃山は立ち去ってしまった。

そんなこんなで、放課後になり・・・

「ちゃんと来るとは褒めてやろう。」

桃山太郎が不敵な笑みを浮かべて言う。

だが、これは無いんじゃないかなあ。

俺達二人を取り囲むようにグリム学園の不良達がいる。

皆手には、金属バットやら危なそうなものを持っている。

「決闘じゃなかったのか？こんなに大勢で来やがって・・・。」

俺は苦笑しながら言った。

「こいつらは観客みたいなもんだ。気にするな。そんなことより、始めようぜ。」

そう言い、桃山はきび団子のようなものをポケットから取り出す。

「喰らえ！ー！！」

きび団子を投げてくるので、左にそれる。
ドーンと大きな音を立て、落下と同時に爆発した。

「お前、木刀を使うんじゃないのか!？」

「木刀は飾りだ。つけてあったほうが不良っぽいじゃねえか!！」
どんな理屈だよ。

あのきび団子、あんなに小さいのに威力は半端ない爆弾っていう分けか。

というより、あんなの当たったら死ぬよね。

主人公でも死んじゃうよ。

おーい、作者、死ぬほどの重症負っても、俺は生きられるの？

「無理だね。多分死んじゃうよ。」

ここに来て作者の声が初登場ですか。って、無理なのかよ……。

「まあ、頑張れ。」

頑張れじゃねえーよ。

「何一人で話してんだよ!！」

俺の不可解な行動にイラついている桃山。

そんなに怒らないで。ってそんなにたくさんきび団子爆弾、持つなよ。

しかもこっちに全部投げてきたんですけど。

「君にも能力があるだろ？」

またしても聞こえてくる作者の声。

俺の能力……勉強はいまいち。料理はまあまあ。運動も剣道が強いぐらい。

「それだ！！剣道があるだろ。竹刀を手に持て。」
作者の声。なるほど、竹刀は、っと。あった。

竹刀を手に取り、その場から離れる。
地面に落下して、爆発が置き、土煙が舞う。

その光景を見て、勝ちを確信した桃山が、土煙の方向に背を向け、
歩き出したその時、

「面！！」

と、大声が聞こえて、桃山の意識が飛んでいった。

「やりすぎたかあ？」

そこには、桃山を見下ろしている御伽宗弥の姿があった。

「大丈夫か？」

気絶している、桃山を心配する俺。

だが、頬を叩いても一向に目を覚まさない。

「ああ、そのやつ。」

たまたま近くにいた、桃山の仲間であろう短髪の不良を指差して言う。

「後のことは任せた。」

気絶した桃山を、不良に預け、俺は寮に帰った。

翌日、朝の教室にて。

「『御伽さん、我々をあなたの子分にしてください。』」
教室に入るなり、待ち構えていたであろう桃山を先頭に、後ろには大勢の不良たちが一斉に頭を下げてその言葉を叫んだのである。

「え!？」

「俺はアンタに負けた。この学校では、グループのリーダーが負けたら、そのグループは勝った相手の子分になるのが暗黙の了解なんだ。」

驚く俺に説明する桃山。

「というわけで、よろしくお願いします。」

「『よろしくお願いします。』」

こうして、俺は不良を大量に味方につけることになった。

第8話「グリム学園の不良」(後書き)

いかがでしたか？
次回もお楽しみに。

第9話「委員決め」

あの決闘の日から、1週間が過ぎ、周りの人間の俺に対する目が変わってしまった。

俺は普通の少年から、不良たちを引き連れる親分みたいな感じに。今まで、声を掛けてくれた女子生徒は怖がり、近寄らなくなり、ちよつとヤンキー見たいなやつが馴れ馴れしく話してくる。

昼食には、不良の誰かが必ずと言って良いほど、焼きそばパンを持ってくる。毎日。

唯一、前みたいに話かけてくれるのは、姫沢さん、赤津さん（面白がっている。）、浦島、乙姫ちゃんぐらいだ。

そして今日も、焼きそばパンが俺の下に届けられた。

「こんな学園生活、嫌だーーーー!!」

「どうしたの急に叫んで!？」

驚く浦島。

「こんなのおかしいか？俺はもつと普通の学園生活を送りたかったんだ。こんな不良たちに囲まれる生活なんて望んでいない。」

「そういうことを、僕に言われても・・・あ、そうだ。今日の特別活動の時間にある委員決めで、何か委員になるのはどうかな？」
落ち込んでいた俺に、浦島が1つの提案をする。

「どんな委員があるんだ？」

「そうだね、学級委員に図書委員、整備委員、体育委員、保健委員、それに風紀委員ぐらいだよ。」

俺の問いに、左斜め後ろの席の赤津さんが答えた。

「それぞれ、クラスから一人ずつ、でも学級委員と風紀委員は男女1人ずつだったと思うよ。」

浦島も付け加えるように言う。

「お勧めは学級委員か、風紀委員かな。でも、風紀委員は不良とかを取り締まるものだからね。君が入ることで、不良たちの抑止力として受け入れられるか、不良として嫌われるかのどちらかだろうね。」

まあ、どっちに転ぶかはボクには分からないのだけれどね、と付け加えて。

「え、でも・・・。」

浦島は何か言いたげだったが、赤津さんが、チラリと浦島を見ると、浦島は黙り込んでしまった。

そして、特別活動の時間・・・

「委員になりたいやつは拳手を・・・。」

「あたし、整備委員になりたい。」

「私・・・図書委員・・・。」

「おいらは体育委員になりたいでござす。」
次々と決まっていく委員。

残すは学級委員と風紀委員である。

「俺、風紀委員やりたいんだが。」

手を上げたのは俺である。だが、その様子に周りの生徒は驚き、先生は動揺して、眼鏡がずれたことにも気づいていない。後ろでは赤津さんがクスクスと笑っている。

「ほ、本当にいいのかい？」

先生が確認を取ってくる。俺は周りの様子を怪しいと思いながらも、「します。」と答えてしまった。

この選択が、良い方向に進むのか、悪い方向に進むのか、この時はまだ誰も知らない。

その後、着々と委員決めは進み、もう一人の風紀委員は、初日に矢を放った、西園かぐやになった。

「・・・よろしく。」

「ああ、えつと、よろしく。」

西園さんはそれだけ言うと、席に戻っていった。

「どうということなんだ？みんな驚いて。」

「それは、多分、風紀を乱すのを取り締まるからだと思うよ。風紀委員は、不良とかと接点が多くなるから、その分、恨まれる事が多くなるんだよ。だから自分から進んでやる人はあまりいないんだ。」
浦島が説明してくれた。

姫沢さんが、疑問に思ったのか、

「でも、かぐやちゃんは自分からやってましたよ。」

と質問していた。そういえばあまり周りの生徒は驚かなかったことを、思い出す。

「彼女は例外なんだよ。君も初日に見ただろ。あの弓道の腕前を。彼女は中等部の頃、風紀委員をやっていて彼女に捕まったのはたくさんいるって話だよ。」

赤津が姫沢の質問に丁寧に答えていった。

「だけど、急に変わったよね。高等部に上がったら、西園さんは風紀委員をやらないうって言うてたのに。どついう風の吹き回しだろうね。」

浦島が赤津に話題を振るが、赤津はさっぱり分からん、といった様子。

そんな話をしていると、次の授業の始まりを告げるチャイムが鳴った。

第9話「委員決め」(後書き)

いかがでしたか？
次回もお楽しみに。

第10話「告白」

「・・・好きです。付き合ってください。」

もうすぐ日が暮れてしまうという頃、校門の前で一人の少女に告白されてしまった。

時間は遡り、放課後・・・

「よく来てくれたにや。」

部活見学として、武道場で練習をしている剣道部を見に行った俺を出迎えてくれたのは猫ひげを生やして、長靴を履いた男の先輩だった。

彼の名前は藤堂猫吉。

おとぎ星にやってきた最初の日、寮の前で剣道部に誘ってくれた先輩だ。

そして今日、藤堂先輩との約束どおり、部活にやってきたのだ。

「さっ、入るんだにや。」

藤堂先輩に連れられ、奥のほうへ行き、隅のほうに座る。

練習中のように、皆、一生懸命に練習している。

暫く練習風景を見た後、

「御伽君もちよつとやってみるにや。」

という藤堂先輩の提案で剣道をやることになった。

軽く準備運動をした後、竹刀を持ち、構える。

相手は2年生だ。

2年生も構え、お互いに間合いを取り合う。

先に動いたのは、2年生だった。

頭を狙ってくるが、俺は間合いをつめ、一気に竹刀を振り落とす。先に相手の体に竹刀が触れたのは、俺だった。

「御伽君の勝ちだにや〜。」

藤堂先輩の声が武道場に響き渡る。

その瞬間、先輩達が驚きの声を上げ、騒がしくなる。

だが、そんな雰囲気が一瞬にして静まり返った。

「じゃあ、次は俺っちが相手するにや〜。」

という藤堂先輩の一言で。

「い、いくら何でも、1年相手に部長自ら相手になることなんてないですよ。」

動揺の色を隠せていない声で、藤堂先輩に言う2年生達。

「久しぶりに本気出せそうだにや〜。」

そんな後輩達の声を見殺しして、ニコニコと上機嫌に竹刀を取り出す藤堂先輩。

「御伽君もいいかにや〜?」

「俺で良ければ。」

俺の返事を聞いた途端、2年生がたは、ガクリと肩を落とし、騒ぎを聞きつけた他の部活動生が武道場の入り口や、窓から中を覗いていた。

窓から覗く先輩達は口々に、

「猫吉のやつ、またやってるよ。」

「今度は1年か・・・。」

「また怪我させちゃうんじゃないの?」

と言っているのが聞こえた。

「それじゃあ、始めるにや。」

その声と共に、試合の開始が告げられたのだが、お互いに動かない否、動けないのだ。

藤堂先輩の構えには全くといって良いほど、隙がないのだ。

それどころか妙な威圧感さえ感じてしまう。

この人強い。

そう思い、竹刀を握る力が強くなる。

刹那、藤堂先輩が動いた。

一瞬にして、俺との距離をつめ、竹刀で頭を狙ってくる。

俺はそれをかるうじて自分の竹刀を当て、払うことに成功し、後ろへ下がる。

だが、藤堂先輩の攻撃が再び、始まる。

一撃一撃が重いのに、その攻撃は止むことはない。

そんな中、藤堂先輩の左手が、腰に挿してあったレイピアを握ったのを見てしまった。

「・・・つつ!!」

俺は素早く後ろへ下がる。

そのおかげで、藤堂先輩が抜いたレイピアの剣先をかわすことに成功する。

というかこれは剣道だよな？二刀流って反則じゃね？ってか、レイピアって十分すぎる凶器だと思うんですけど。

そんなことお構い無しにレイピアと竹刀の二刀流で、攻撃してくる藤堂先輩。

俺は勢いをつけて竹刀を振りかぶり、レイピアを弾き飛ばした。

空中に舞ったレイピアが武道場の入り口目掛けてゆっくりと落下していく。

そこには数名の部活動生の姿がいた。部活動生は我先に出ようと押し合う中、ただ一人、腰を抜かしたのか、女生徒が座り込んでいた。

「やばっ!!」

俺はそれに気がつき、目を奪われた一瞬、藤堂先輩の振りかぶった竹刀が俺の横腹に当たり、吹き飛ばされる。

運が良かったのか、たまたま飛ばされた方向が武道場の入り口だった。

俺は飛ばされた勢いで、その女生徒を掴みその場から引き離す。

「いてて・・・。」

勢いよく外に飛び出た俺はコンクリートに強打してしまった。

だが、俺が下敷きになったのか、女生徒は傷一つ無かった。

「大丈夫?」

「大丈夫です。ありがとうございます。」

彼女は縮こまりながらも、礼儀正しく頭を下げて言った。

「1年、大丈夫か?」

心配そうな顔をしている2年生が俺の安否を確かめにやってきたようだった。

「平気です。」

そう返し、立ち上がって、武道場の中へ戻った。

日が暮れてきた頃、部活を終えた俺は寮に帰るため、校門を出よう

とした。

「あのおゝ。」

目の前にやってきた女性は、先ほど俺が助けた女性だった。

「本当に怪我とかなかったのですか？」

俺はあらためて彼女に聞くが、彼女は首を横に振り、俺の顔を見つめ、

「・・・好きです。私と付き合ってください。」
と言った。

それは俺にとって初めて告白された瞬間だった。

第10話「告白」(後書き)

いかがでしたか？
次回もお楽しみに。

第11話「アクシデント」

「好きです。付き合ってください。」

突然の告白に、戸惑うこと数秒、

「あのお・・・？人違いでは？」

ようやくのどの奥から声が出た。

「いいえ、あなたは御伽宗弥様ですよ。」

御伽宗弥、確かにそれは俺の名前だ。

「俺は御伽宗弥だが・・・。」

「ならあなたは私が好きになった人で間違いありません。」

結構大きな胸を張って言う目の前の女の子。

改めてみてみるが結構可愛いと思う。俺より一つ年上だが、童顔で
同じ年か年下に思われてもおかしくない。長い青髪の左右に着けて
いる赤いリボンが風でゆさゆさと揺れる。

「でもほら、今日、会ったばかりだぜ。それに名前も知らないし・・・。」

「自己紹介がまだでしたね。私は2年2組の亀宮すみ^{かめみや}のと申します。
それに会ったことありますし・・・。」

彼女と会ったことがある？

記憶を探ってみるが思い出せない。

そんなことよりも返事を返さないと。

「ごめ・・・。」

「御伽君、危ない!!」

浦島の声が聞こえたと思うと、ドン、と背中を誰かに押され、その
まま前のめりになる。

そして、フワツと言いついぐいがしたと思ったら、目の前には、驚いている亀宮先輩の顔があった。
唇には柔らかな感触が。

そのことから瞬時に理解する。ヤバイ、取り返しのつかないことをしたのではないかと。

慌てて口を離して距離を取る。

こういうことはアニメとかではよくある展開だが、ここは現実だ。二次元じゃない。

まして相手はお年頃の女性だ。

事故だった、何て言い訳は通用しないだろう。もし、これが彼女のファーストキスだったりしたら、きつと心に深い傷を負うだろう。そしたら、俺は、俺は・・・、

「・・・切腹しよう。」

日が沈もうとしている空を遠い目で見ながら呟いた。

そんな様子を見ていたかは分からないが、いや、おそらく見ていたのである浦島は、

「・・・ごめん。御伽君。」

一言そう言つと、浦島が俺にぶつかった原因であろう乙姫ちゃんを連れて立ち去っていった。

俺と亀宮さんの間に気まずい雰囲気流れる。

「・・・あ、あの。ごめ・・・。」

口を開こうとするが、

「・・・嬉しいです。そ、その・・・キスしたってことは・・・付き合ってくれるってことですよな？」

とほんのり頬を赤く染めて上目使いで言ってくる亀宮さんの言葉で遮られた。

ってあれ？怒ってない。それどころか嬉しそうだ。

もしかして事故ってことに気がついていないのか？

「あ、あの・・・。」

「じゃあ、明日、一緒に学校に……。私も寮生なんで、8時に男子寮の前で待っていてくださいね。」

パタパタと手を振って嬉しそうに帰っていく亀宮さん。

残された俺は、遠ざかっていく亀宮さんの背中を見つめることしか出来なかった。

そんな俺を寮で待っていたのは、キスする原因となった浦島と乙姫ちゃん、それに噂を聞きつけて、不敵な笑みを浮かべる赤津さんの3人だった。

第11話「アクシデント」(後書き)

いかがでしたか？

短めです。すいません。

次回もお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5622m/>

俺と童話のキャラと学園生活

2010年10月8日21時18分発行